

アートはひとをつなぎ、まちを紡ぐ・・・その1

令和4年度市民まちづくり研究員

廣田 哲 小松公秀

橋田和義 藤村真由美

1. 研究の背景と目的

草ヶ江校区は、六本松の九州大学跡地に福岡市立科学館・裁判所・集合住宅他が整備され、新たなまちづくりの起点となっている。そして、大濠公園内の福岡市立美術館の西側に「新福岡県立美術館」が令和11年に開館する。大濠公園と二つの美術館との相乗効果により芸術文化の拠点が生まれ、隣接する草ヶ江校区の賑わいが考えられる。この機をとらえ、美術館と草ヶ江校区をつなぎ、アートを楽しみながらまちを歩くことができる仕組みの構築により「アートによるまちの活性化をはかる」ことを研究の目的とする。

2. 研究の手法・内容

本研究では、まちのたくさんの歴史や資源を調査・発掘して、草ヶ江校区の活性化をはかるために3つの手法により方向性を導く。

- 1) まずは街を知ることから始め、地域の資源である歴史や現状の街路・街並みを調査・分析し、まちの景観向上の手法とアートが設置できる空間の有無を考察する。
- 2) まちとアートの関係性や地域の歩きたくなる「みち」を調査・考察し、具体的に科学館と美術館へのルートにより、地域の活性化の可能性を検証する。
- 3) まちづくりの将来を見据え、コミュニティ形成のための組織づくりやワークショップとアンケート調査から住民の考えを分析・把握してアートのまちを持続するための仕組みを検証する。

3. 研究の結果

3つの手法により調査・分析・考察した結果を次に示す。

- 1) 地域の資源を活かすために歴史や街路・街並みを調査・考察した。202号線沿いの福岡市立科学館周辺の歩道は広く緑豊かでありアートの設置が可能である。その他の街路は、景観を構成する要素が混在しておりアートの空間を見いだすことは難しく、景観向上のために街路の要素を整理して改善することを継続する手法を提示する。

- 2) 六本松駅・福岡市立博物館から福岡市立美術館・新福岡県立美術館をつながる街路や歩道を歩いて考察した結果は、福岡大附属大濠高校沿いに、わかりやすい「ふれあいストリート」とカフェや雑貨などの商店がある「みちくさストリート」をルートとして設定し、ストリートを構成する「ひと中心」の「アートのみち」を提案する。
- 3) まちづくりとアートについて地域住民の考えを把握するために、屋外イベント（プレイパーク）に参加し、こどもたちとの絵画体験と住民との交流やアンケート調査を行った。住民からはイベント・まちづくりに積極的に参加やアートは必要などの意見があり、住民の関心が高いことが分かった。今後は、ひとと人の交流や人づくりの仕組みをつくり継続・継承する。

4. 研究の課題・まとめ

草ヶ江校区は、六本松の福岡市立科学館から、大濠公園の新福岡県立美術館の計画により、地域が魅力的で活力に満ち発展する可能性がある。そのためには、地域住民や各種団体・協議会・福岡市・民間・商店街との連携や情報発信・情報共有などネットワークの再構築を行う。そして、住民とのワークショップ等を継続して合意形成をはかり、まちとアートについて福岡市や行政に要望を提示する。まちの未来を見据え、継承するためにひとと人をつなぎ、まちとアートをつなぐ仕組みを確立し、こどもたちの豊かな感性や創造性を育む『アートがある魅力あふれるまち』をめざす。

※これからのアートのまちを整備するために、まちづくりの手法や人づくりを促進する具体的な提案と詳細な資料を添付している「・・・その2の説明資料」をご覧ください。